



PRESS RELEASE

岡山大学記者クラブ御中

令和4年7月29日

岡山大学

「家族や子どもに迷惑をかけたくない」という思いは何か？ —シンポジウム「超高齢社会・現代日本の〈迷惑〉意識」の開催

◆発表のポイント

- ・超高齢・人口減少を迎えた日本において、老年期の生き方や死をめぐる状況が著しく変化しており、老い・看取り・死について様々な角度から考えていくことが急務です。
- ・老い・看取り・死について考える際に、現代日本の多くの人々が「子どもや家族に迷惑をかけたくない」（〈迷惑〉意識）という思いを抱いています。この〈迷惑〉意識に注目し、現代と過去、日本と異なる文化圏を比較しながら、「老い」や「死」の捉え方について共同研究を進めています。
- ・2022年9月19日（月）に現代日本における〈迷惑〉意識を探究している研究グループ（現代日本研究班）の中間的な研究成果を報告するシンポジウムを開催します。

2021年10月1日現在、日本の総人口は1億2,550万人、65歳以上の人口は3,621万人、高齢化率は28.9%です（「令和4年版高齢社会白書」）。超高齢・人口減少社会を迎えた現代日本において、老い・看取り・死を考える際に、多くの人々が「家族や子どもに迷惑をかけたくない」（「負担をかけたくない」「苦勞をかけたくない」など表現は多様、以下「〈迷惑〉意識」と表記）という思いを抱いています。例えば、「平成29年度人生の最終段階における医療に関する意識調査」（厚生労働省）では、「どこで最期を迎えたいかを考える際に、重要だと思うこと」という質問について、「家族等の負担にならないこと」と回答した一般国民は73.3%です。

以上のような「家族や子どもに迷惑をかけたくない」という思いについて、①いつ、どのように形成されたのか（歴史班）、②日本的な意識なのか否か（フィールド調査班）、③現代日本におけるこの意識の特質は何か（現代日本研究班）という3つの視点から研究班をつくり、〈迷惑〉意識の正体をつきとめるために共同研究を進めています（科研費・基盤研究A「日本社会の「老い」をめぐる分野横断的研究—「迷惑」と「ジリツ」の観点から」課題番号20H00007）。

2022年9月19日（月）（敬老の日）13:00～18:30に、上記の現代日本研究班の中間的な研究成果を発表するシンポジウムを開催します。

◆研究者からのひとこと



本村教授

自分の両親や祖父母が「家族や子どもに迷惑をかけたくない」と話しているのを聞いたことはありませんか？また、自分の人生の最終段階を考えると、こうした思いを抱くことはありませんか？みなさんと一緒にこの〈迷惑〉意識の正体について考える機会にしたいと思っています。



PRESS RELEASE

<シンポジウムの内容>

開催日時：2022年9月19日（月）13:00～18:30

会場：岡山大学津島キャンパス 工学部5号館 15番講義室（※オンライン同時開催）

テーマ：超高齢社会・現代日本の〈迷惑〉意識

13:00～15:10

趣旨説明

現代日本における老いと〈迷惑〉意識

1. 工藤洋子（東北福祉大学） 日本の〈迷惑〉意識に関する文献レビュー
2. 山本栄美子（東京大学） 『恍惚の人』以降の「老い」・「介護」意識の変容—いつから〈迷惑〉意識を持つようになったのか
3. 吉葉恭行（岡山大学）：介護技術開発と〈迷惑〉意識
〈コメント〉

山本大介（大東文化大学）、小野真由美（ノートルダム清心女子大学）

休憩（10min）

15:20～17:00

〈迷惑〉意識の海外との比較

4. 田中菜摘（岡山大学） 『おだやかな死』における〈迷惑〉の用例
5. 日笠晴香（岡山大学） 〈迷惑〉意識と自律—スピリチュアルペインとSPBの議論を手がかりに
6. 鈴木亮三（岡山大学） 相互行為としての〈迷惑〉意識
〈コメント〉

島田雄一郎（大島商船高等専門学校）、大塚美樹（島根県立大学）

全体討論・閉会 17:20～18:20

主催：科研費・基盤研究 A「日本社会の「老い」をめぐる分野横断的研究—「迷惑」と「ジリツ」の観点から」（課題番号 20A00007）

共催：「人ならざるもの」の擬人化を通じた人間社会とデジタル技術との調和・共生に関する研究（東北大学「持続可能な社会の創造を目指す研究スタート支援事業」）

申込方法

事前申込。以下の URL からお申し込みください。オンライン参加の方は、申し込みされた後、URL をお送りいたします。

<https://forms.gle/RmuNWeThTiU741MDA>



PRESS RELEASE

■発表内容

<現状>

2021年10月1日現在、日本の総人口は1億2,550万人、65歳以上の人口は3,621万人、高齢化率は28.9%です（「令和4年版高齢社会白書」）。超高齢・人口減少社会を迎えた現代日本において、老い・看取り・死を考える際に、多くの人々が「家族や子どもに迷惑をかけたくない」「負担をかけたくない」「苦勞をかけたくない」など表現は多様、〈迷惑〉意識」という思いを抱いています。たとえば、「平成29年度人生の最終段階における医療に関する意識調査」（厚生労働省）では、「どこで最期を迎えたいかを考える際に、重要だと思うこと」という質問について、「家族等の負担にならないこと」と回答した一般国民は73.3%です。そのほか、老い・看取り・死に関するさまざまな調査、雑誌や新聞記事、CMやドラマなどで、〈迷惑〉意識が多くみられます。

〈迷惑〉意識について、これまでの研究では、社会学、哲学、医学、看護学などの分野で研究が進められてきました。そこでは、およそ以下のようなことが明らかになっています。

- ①前近代にはない近代社会が生み出した産物とし、近代以降の社会構造のなかで生まれた特有の意識であること（時間軸でみた特性）。
- ②日本的なもの、また日本文化の特質が刻印されていること（空間軸でみた特性）。
- ③「迷惑をかけたくない」という意識には「自立・自律した存在でありたいという願望」「自分の所属する集団から排除されたくないという意識」「相手への気遣い」などの隠れた「思い」や「意識」が存在すること（〈迷惑〉意識の重層性）。

従来の研究で明らかにされてきたことについては、再検討が必要です。今回のシンポジウムでは、③に関わる研究を進めている現代日本研究班の中間的な成果を報告する予定です。

<社会的な意義>

このプロジェクトが進むことによって、多くの人々が抱く〈迷惑〉意識の正体が明らかになり、医療・介護現場におけるケアの質の向上、老年期を生きる人々の生き方を支える「老い」や「死」の捉え方や価値の創出が期待されます。

■研究資金

本研究は、科研費・基盤研究Aの支援を受けて実施しています（課題番号20H00007）

<お問い合わせ>

岡山大学学術研究院ヘルスシステム統合科学学域
教授 本村 昌文
(電話番号) 086-251-7395

